

コウノトリの野生復帰における「野生」

菊地 直樹

(兵庫県立大学／兵庫県立コウノトリの郷公園)

兵庫県北部の但馬地方のコウノトリの野生復帰プロジェクトは、放鳥第2世代の誕生を受け、新たな段階に入ったといえる。野生復帰とは人が何らかの関与をしながら、あるべき自然の姿としての「野生」をめざしたさまざまな取り組みの総体であるが、目標である「野生」は曖昧で、改めて問われることがない。人がどのように関与していくのかもほとんど議論されることはない。現場レベルでは、給餌の是非など「野生」をめぐる齟齬が見られなくもない。人里を舞台とするコウノトリの野生復帰では、必然的に価値基準や現状認識が多様化してしまう。どのような価値に基づき、どのように人が関与しながら、野生復帰を推進していくのかという見取り図は必要であろう。

本稿では、「野生」を関係的な概念としてとらえ直した。人による動物への関与の強弱という軸と動物への価値付与という軸から、人と動物のかかわりを再野生化-家畜化のプロセスとしてとらえ、図表を提示した。「野生」と「家畜」は動的な存在であり、人と動物のかかわりによって、動物はこの象限内を移動する。

コウノトリの野生復帰の取り組みをこの図に従い再考すると、再野生化という一方向に進んでいるのではなく、再野生化と家畜化の間を「行きつ戻りつ」している。正解のない「野生」をめぐるさまざまな論理や価値や感情を試行錯誤しながらつなげ、多様な主体間での目標や地域の未来像を絶えず構築し続ける仕組みが求められる。この課題に対して、「聞く」という手法を持つ環境社会学者が果たしうる役割について指摘した。

キーワード：野生，コウノトリ，野生復帰，再野生化-家畜化，給餌

1. はじめに

1.1. 1羽のヒナの巣立ちから

2007年7月31日、1羽のコウノトリが巣立ちした。国内では、1961年に福井県小浜市で2羽のヒナが巣立ちして以来のことであった。その現場は、兵庫県豊岡市百合地の田んぼのなかに設置された人工巣塔である。付近は、ヒナの動向に一喜一憂する人たちが多数集まり、神戸新聞が「自然界で46年振り」という見出しの号外を出すほどの騒ぎとなった。

かつて日本のコウノトリは、田んぼや湿地に生息するドジョウ、フナなどの魚類や小動物を餌とし、里山の松の大木などに直径1~1.5mほどの巣をかけていた。江戸時代には、日本各地に生息していたとの記録があるが、農薬の使用や自然破壊などによって、その姿は徐々に消えていき、1971年に豊岡市で最後の1羽が保護された後、死亡した。繁殖個体が消滅したことから、基本的には野生下では絶滅したといえるだろう。

現在、最後の生息地となった但馬地方では一度野生下で絶滅したコウノトリを、飼育下で繁殖

し、再び野生に戻すという野生復帰プロジェクトが進行している（菊地，2006）。1999年，野生復帰の拠点施設である兵庫県立コウノトリの郷公園（以下，郷公園）が開園し，野生復帰に向けた研究と実践に取り組んでいる。兵庫県は豊岡市や地域団体，NPOとともに『コウノトリ野生復帰推進計画』（以下，『推進計画』）を2003年に策定し，その計画に則り，2005年から飼育で繁殖したコウノトリを放鳥している。野生下で絶滅した種の野生復帰は，自然保護の最先端の取り組みであり，日本で本格的に実施されるのはコウノトリが初めてである。世界的に見ても，人里での大型動物の野生復帰は珍しい。ヒナの巣立ちも，野生復帰の進展を示す出来事であった。

筆者は郷公園の研究者として，巣立ちという騒動の渦中にいながら，ある違和感を持たざるを得なかった。違和感を持ったのは，2006年9月に放鳥したコウノトリを親とする放鳥第2世代のコウノトリだからである。いったい，どこからが野生の鳥といえるのだろうか。そもそも線引きすることに意味はあるのだろうか。

また，定着を目的とした給餌に依存していることもそうである。この巣立ちも人間の管理下なのか，管理外の出来事だったのか。給餌に依存するコウノトリたちは野生の鳥といえるのだろうか。給餌は野生を損なうものなのだろうか。

筆者はコウノトリの野生復帰における「野生」とは何かについて考えざるを得なかったのである。以前，野生復帰の課題を以下のように指摘したことがある。1つは野生復帰したコウノトリへの人の関与の問題である。当面は，人に依存しながらコウノトリは生活していかざるを得ないにしても，徐々に人の関与をなくしていくことが，野生復帰のめざすべき方向性であろう。今後，人の関与をどのようなものにしたらいののだろうか。2つ目は人とコウノトリのかかわりを再創造するという課題にとっても，人の関与の問題は重要であることである。人が関与し続けること，たとえば給餌を継続的に行えば，コウノトリへの愛着，特定の個体への愛着は生じてくるだろう。そうした愛着は野生復帰にとってどのような意味を持つのだろうか。人によるコウノトリへの関与をめぐって，「野生」とは何かが問われていると指摘したのである（菊地，2006：241-242）⁽¹⁾。

1.2. 問題としての「野生」

野生復帰とは人が何らかの関与をしながら，あるべき自然の姿としての「野生」をめざしたさまざまな取り組みの総体といえる。「野生」は目標であるが，曖昧で，改めて問われることがないし，人がどのように関与していくのかもほとんど議論されることもない。現場レベルでは，自然再生の現状認識や給餌の是非，目的などをめぐって齟齬が見られなくもない。たとえば，給餌は「野生」を損なうのか，それとも「野生」に向けた行為なのか。「野生」なのだから極力人は関与すべきでないのか，否か。個体への愛着は「野生」にふさわしくないのか，否か。「野生」の定義そのものが争点となるのである。

ただ，「野生」の曖昧さが，単純に問題であると指摘したいわけではない。逆に「野生」に本質的な価値を付与し固定的にとらえてしまうと，生きものとのかかわり方や共存のあり方を固定化してしまい，共存が求められる地域社会との齟齬を招いてしまうだろう⁽²⁾。コウノトリを野生に戻すというプロセスで，構築されるコウノトリと自然とのかかわりのダイナミズムが，損なわれてしまうにちがいない。

人里を舞台とするコウノトリの野生復帰は，研究者や行政，市民，農家，漁業者等多くの主体

菊地：コウノトリの野生復帰における「野生」

がかかわりながら進められるべきものである。こうした関係主体の拡大は、価値基準や現状認識が多様化することを意味しており、相反する価値を含む複数のかかわりが存在することも想定される（丸山，2007：10-11）。人の関与の程度及びそこから生じる多様な価値や感情という具体的な問題をどのように調整し、合意形成するのかという意味において、「野生」を問い直さざるを得ない。

本稿は、コウノトリの野生復帰における「野生」をめぐる問題を問い直し、以下のことを明らかにすることを目的とする。まずは「野生」を关系的な概念としてとらえ直す。しかし、それだけでは、現場では何の解決ももたらさない。次に、野生復帰の見通しとなる図の提示を試み、人の関与のあり方を位置づけたい。それに基づき具体的な出来事の分析を行い、野生復帰といったプロジェクトにおける環境社会学者の役割を指摘する。

2. コウノトリの野生復帰における「野生」の定義

以前、筆者はコウノトリの野生復帰を「コウノトリがかつて生息していた地域社会の自然環境と文化を総体として保全・創造し、今後コウノトリも棲める地域社会のあり方を模索する試みの総体」（菊地，2006：35）と定義した。地域再生としての野生復帰である。野生復帰は総合的な取り組みであり、市民、NPO、行政、研究者等の協働が不可欠であることを意識した定義であるが、「野生」についてまったくふれていないことに気づく。

『推進計画』は野生復帰を「国際自然保護連合のガイドラインによる『再導入』を指し、過去における生息地またはその一部であった場所に、そこから一度、駆逐されたり絶滅した種を野生に復帰させる取り組みを言い、存続可能な個体群の確立を意図している」と定義している（コウノトリ野生復帰推進協議会，2003：1）。存続可能な個体群の確立は目標として共有されているが、「野生」は定義されていない。「野生」はブラックボックスなのである。

もちろん、私たちは「野生」への問題関心がなかったわけではない。郷公園の研究部長である池田啓は高病原性鳥インフルエンザへの対応時、家畜伝染病予防法に基づいて扱う場合と野生動物として扱う場合との両面を見定めて、野生復帰を待つ飼育下のコウノトリに対応せざるを得なかったと振り返る。そこから見えてきたのは、コウノトリの存在の曖昧さであった（池田，2004）。

池田は、郷公園のコウノトリは一時的には飼育下に置かれ人の管理下にあるが、いずれその管理を離れるべき野生動物であるとの認識に基づき、動物を家畜とペットと野生動物とに明瞭に区分する。そのうえで、家畜化の度合いを縦軸にとり、横軸にこの区分に関係なく、その動物と人との関係の度合いをとり、動物の存在状態の多様さと動物分類の曖昧さを明確化しようと試みる（図1）。この視点に基づき、横軸にとった人との関係の度合いが人による関与の許容度となると考える。すなわち、野生動物への関与の許容という問題を議論することが可能になる。人のかかわりが弱くなれば、関与の度合いも弱くなるだろう。

この視点から池田は、放鳥コウノトリは「飼い鳥」か「野鳥」か、という問題を提起し、放鳥コウノトリは存在として曖昧で、関与の度合いも必ずしも明確ではないとした⁽³⁾。加えてどのよ

野生種	動物園で飼育されるタヌキ	町のタヌキ 六甲山のイノシシ	タヌキ イノシシ
	多摩動物園のコウノトリ	郷公園のコウノトリ	放鳥した個体、ハチゴロウ
	大島公園のキョン	東京都のカラス	八丈島キョン
ペット	イヌ、ネコ	ノライヌ、ノラネコ	ノイヌ、ノネコ
	アライグマ	ドバト	北海道のアライグマ
	ブラックバス		芦ノ湖のブラックバス ワカケホンセイインコ
家畜	ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ブタ	寒立馬	イノブタ
	イノブタ	岬馬	小笠原のヤギ
	ニワトリ	トカラ馬	

強 ←————— 人と関係の度合い —————→ 弱

(出典) 池田, 2004 : 77。

図1 動物をどのように分類すべきか

うな状態にあるものを野生動物と見なすのかも検討課題であるという。

池田が指摘するように放鳥コウノトリの存在は曖昧である。たとえば、放鳥に関する法律は整備されておらず、人の占有下にあった動物を放す行為は動物愛護法における虐待行為と解釈されるかもしれない(羽山, 2006 : 120)。放鳥したコウノトリたちはどのような存在なのか、どのようにかわるべきかについて、明確な答えがあるわけではない。

この議論は野生種とペットと家畜との明確な区分に基づいたうえで、人のかかわりの程度と関与の度合いを結びつけて考えている点に特徴がある。ただ疑問点もある。第一にかかわりと関与の具体的内容が不明瞭な点である。野生復帰では人の関与の度合いとその内容が争点となっている。第二に動物の価値の多様性を十分とらえられないことである。人のかかわりによって、動物の価値はどのように変わるのか。第三に、野生種とペットと家畜の区分である。野生種とペットと家畜は、明確に区分できるのだろうか。人のかかわりによってある動物がより野生的な存在と価値づけられたり、逆に家畜的な存在として位置づけられたりするのではないか。

たとえば、同じコウノトリという種であっても、「野生」の感じ方が異なることはありえる。筆者らが実施したアンケートで野生の生き物だと思われるもの全てに○をつけてもらった結果⁽⁴⁾、ツキノワグマが95.9%、タヌキが95.6%、放鳥したコウノトリが24.9%、ハクチョウが72.0%、奈良公園のシカが5.2%、シカが93.5%、2002年に豊岡に飛来した1羽のコウノトリ(通称ハチゴロウ)が72.0%、野良猫が40.2%であった。生物としては同じコウノトリであっても、「野生」の感じ方がかなり違うようだ。また注目したいのは、「野生」的と考えられるハチゴロウでさえも72.0%に過ぎないことである。人はさまざまなフィルターを通して生きものを認識している。

何に「野生」を見出すかは曖昧であり、「野生」を明確に区分することは困難である。生物学的に見ても、イノシシとブタを区別する境界線は不明瞭であり、遺伝学的にも区別することは困難であるという(高橋, 2001 : 20)。したがって、野生と家畜とペットは明確に区分されるのではなく、人間のかかわりの度合いのなかで変化するものにとらえた方がよい。私たちは人間からの干渉が無いところで生きている生き物を「野生」と漠然と認識しているが、その境界線はか

菊地：コウノトリの野生復帰における「野生」

かわりの度合いの問題であり、曖昧なのである。

3. 人と動物のかかわりとしての家畜化－再野生化

羽山伸一は、野生動物と人間とのあいだに、多様で問題をはらんだ新たな関係が急速に生まれれており、野生動物と人間との関係性にある問題を「野生動物問題」と名づけ、新しい問題領域を設定した（羽山，2001：8）。コウノトリの野生復帰は、絶滅危惧種問題のなかで、野生動物との関係性の新たな局面として取り上げられている。

羽山は、さまざまな野生動物問題を扱うなかで、「本来の生態を失った野生生物は、生きたぬいぐるみに等しい。われわれが未来の世代に果たすべき責務は、あるべき自然の姿を保全することである」「ありのままの自然に価値を求める」「進化しない生き物は野生動物とは言えないのだ」と述べている。本来の生態，ありのままの自然，進化という言葉が見られるように，人間の干渉を受けず自然淘汰する状態を「野生」と考えているようだ⁽⁵⁾。

羽山は、和歌山県のタイワンザルの問題を扱うなかで、畜産学で野生動物の生殖を人が管理し、その管理を強化していく過程を「家畜化」と定義していることを理由に、避妊処置をされた動物を野生動物と呼ぶことに疑問を呈している。そして野生動物を「野生」のまま存在させようとするならば、避妊処置は許されるべきではないと主張する。つまり、人による生殖管理の有無によって「野生」を線引きするのである。

では、畜産学ではどのような議論が展開されているのだろうか。野澤謙と西田隆雄は、家畜化によって新種の形成は起こっていないと指摘する。動物を家畜と野生動物に二分することなどできず、純粋に野生の動物から極限まで家畜化された動物にいたるまで完全に連続しており、区切り目はないと主張する。人の関与のあり方こそがある動物を家畜へと移行させる要因という。そのうえで「家畜とはその生殖がヒトの管理のもとにある動物」（野澤・西田，1981：3）と定義する。

家畜化とは「ヒトの側が初めは無意識的に、後にはそれによる利益に気づいて意識的かつ計画的に、動物の生殖を自己の管理下に置き、管理をより強化していく、世代を越えた連続的な過程であり」、「家畜化とは、動物が受ける自然淘汰の圧力が、人為淘汰の圧力によって徐々に置き換えられていく過程」にほかならない（野澤・西田，1981：5）。

家畜化は人と動物の相互関係のなかで起こる現象であり、双方に要因がある。自然条件として人と動物との生物としての接近があり、雑草的生態を持った動物が家畜化されるという。雑草とは、人によって攪乱された環境に適応した作物以外の植物のことであり、作物と雑草とは生態学的類似性が高く、人に役に立つものが作物で、役に立たないものが雑草と位置づけられる。この雑草的生態は動物にも見られ、スズメ類やネズミ類などはまさにそうであるという。コウノトリも雑草的生態を持った動物といえる⁽⁶⁾。

人間の側の条件としては、雑草的生態を持った動物を食肉獲得といった資源的に利用することがまず考えられる。ヒトの心のなかに存在理由がある家畜もいるだろう。精神的な利用である。学術的な目的から生殖管理に及ぶこともある。絶滅のおそれのある野生生物保護では、緊急手段

として野生生物を動植物園など飼育下に持ち込んで、保護することがある。「野生」動物の保護と増殖を目的に、生殖管理や遺伝的管理が行われるのである。

そして餌づけという人間の行為を家畜化のプロセスの萌芽形態と指摘する。給餌は家畜化を進展させ、自然淘汰圧が人為淘汰圧によって置き換えられる。

家畜化は動的なものであり、逆行過程である再野生化もまた同様に理解すべきである。再野生化という現象は、家畜化が停滞も後戻りもあり得ることを示している。人の管理がどの程度弱まったかによって、再野生化がどこまで進行するかもある程度決まると指摘する（野澤・西田，1981：1-32）。

ここまでの議論を整理してみよう。第一に指摘できるのは、家畜化とは人と動物のかかわりであり、人による関与の度合いを強めていくプロセスということである。とりわけ生殖の管理を強化するプロセスといえる。第二に家畜化されるのは人と出会う動物であるということである。動物側の条件は雑草の生態を持っていることである。人による利用としては、資源的、精神的、最近では学術的なものが考えられる。したがって家畜化の対象はいわゆる家畜に限定されることはなく、ペットや保護増殖動物も含まれる。第三に餌づけは、家畜化への萌芽ということである。野生動物への保護を目的とした給餌も含まれるが、そうした直接的な給餌に限定されない。羽山は自然界のものとは違う餌が手に入るのであれば、動物側からは同じことであり、その意味で農業とは餌づけであるという（羽山，2001：102）。第四に、再野生化は、人の関与の度合いが弱まっていくプロセスである。家畜化と再野生化は、停滞もあれば後退もある双方向に開かれた複合的なプロセスなのである。

生殖管理という関与が「野生」と「家畜」を区分する指標といえるが、以上のように「野生」と「家畜」は動的なプロセスであり、両者を本質的に区分することはあまり意味がない。家畜化-再野生化は、一方的かつ実体的な概念ではなく、双方向的、関係的な概念である。

以上の議論をもとに、横軸に人による関与の強弱を置き、縦軸に動物への価値を設定すると、図2になる。横軸はほとんど人の関与が及ばない状態から、田んぼや里山など二次的な自然、そして餌づけ、生殖の管理へと関与が強くなる状態を想定できる。縦軸は、人間が動物に資源的価値、精神的価値、学術的価値を見出すのかによって便宜的に線引きする⁽⁷⁾。いわゆる「家畜」は右上に位置することになる。「ペット」は右の真ん中に位置し、「保護増殖動物」は右下に位置する。この分類に違和感を持つ人も多いかもしれないが、自然再生や野生復帰という人の関与が重要なファクターになる自然保護を意識した分類である。田んぼに適応した「農業生物⁽⁸⁾」は、左から二列目に位置する。人の関与が弱く、学術的視点から価値づけられる動物は左下の「原生」に位置づけられる。一般的にイメージされる「野生」はこの象限と考えられる。

区分は便宜的であり、現実的にはこれらの領域は重層することが多々見られるだろう。同じ動

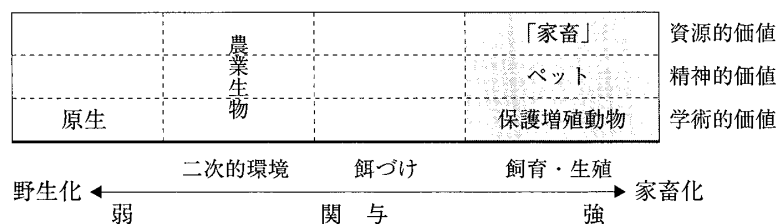


図2 家畜化-再野生化

菊地：コウノトリの野生復帰における「野生」

物であっても、人の関与と価値づけによってこの象限のなかを重層しながら移動する。コウノトリの保護の歴史と野生復帰の取り組みは、家畜化－再野生化の「行きつ戻りつ」というプロセスととらえ直すことができる⁽⁹⁾。この図を野生復帰の見取り図として使えないだろうか。

4. コウノトリ保護史再考

家畜化－再野生化図式に基づき、兵庫県但馬地方におけるコウノトリの保護史の再解釈を試みたい。詳細はすでに論じているので（菊地・池田，2006），最小限の記述に留める。

但馬地方は江戸時代からコウノトリの生息地として知られていた。出石藩の幕末期の執務日誌をまとめた『御用部屋日記』に鳥獣害に対する百姓からの願い（陳情）が残っている。江戸後期にはコウノトリが普通に田んぼにいたのであろう。但馬でコウノトリは農業生物であったことが分かるが、給餌の記録はない。

明治になると、日本各地で大型鳥類の密猟が横行した。但馬地方でも一時期減少したが、1904年、兵庫県知事は銃猟禁止地区と定め、1908年に狩猟法の保護鳥となり、1921年3月に出石の繁殖地である鶴山が天然記念物指定を受けた。明治後期から大正期にかけて、「給餌場」の設置、国庫補助での「給餌」などの保護策が実施され、羽数は順調に増加していった。明治後期から昭和初期にかけて、鶴山には「茶店」が開設され、多い時には1日2000人もの見物客が訪れたという。この時期、保護のための「給餌」が実施された。

1943年、鶴山の松が伐採され、営巣地は広く分散してしまった。羽数が減少するなか、1955年、コウノトリ保護協賛会（後、但馬コウノトリ保存会）が設立され本格的な保護運動が始まった。コウノトリは学術的な視点から価値づけられるようになった。但馬コウノトリ保存会は生息・生態調査を実施し、1959年に「人工巣塔」を設置した。1959年以降、田んぼなどを借り上げ、ドジョウ、フナなど小魚を放流しコウノトリの餌場とする「人工餌場」を豊岡市内に設置した。小・中学校の協力のもと人工餌場に供給するドジョウを集める「ドジョウ一匹運動」も展開された。この時期、人間が関与を強める保護策がとられたが、羽数は減り続けていった。

1963年、巣から採卵して「人工孵化」する試みが開始されたが、ヒナはかえらなかった。1965年、豊岡市福田で1ペアを捕獲し「人工飼育」が開始された。この段階で関与はより強まり、「生殖管理」が行われるようになったが、人工繁殖は成功しなかった。その一方で野外での個体群は壊滅していき、1971年に最後に残っていた1羽が保護され、1ヵ月後に死亡した。日本で生息していたコウノトリの個体群は絶滅した。

1985年、ソ連（当時）のハバロフスクから6羽の幼鳥が贈られ、これらを創設ペアにして人工飼育から24年たった1989年、はじめてヒナが誕生した。これ以降日本で生まれた個体同士によるペアからもヒナが生まれ、「飼育下繁殖」は順調に進み、2008年には100羽前後のコウノトリが飼育されている。

郷公園では、健康に飼育・管理され、遺伝的な多様性に富んだ複数のペアを創り出し、安定した飼育下個体群を形成することをめざした飼育下繁殖に関する研究を行っている。ペア作りや産卵調整など人が介入することもある。

保護史を再解釈すると、コウノトリは農業生物として存在していたが、明治期から大正期にかけて給餌による保護を行い、人による関与が強くなった。その後、1965年からは飼育下繁殖の段階に入り、生殖管理の段階に入ったといえる。但馬のコウノトリは、保護鳥となる過程で人による関与を強く受けるようになった。「家畜化」の度合いが強くなったといえる。

5. ゆらぐ「野生」

5.1. 自立促進作戦

放鳥は『推進計画』に則って実施されたと述べたが、その第4章「野生復帰の方法」では、放鳥計画（案）として飼育下繁殖とモニタリング体制の構築、4つの放鳥の方法が論じられ、野生復帰の留意点として放鳥のリスク分析とガイドラインの作成が上げられている。放鳥の方法は明示されているが、「野生」に戻すプロセス、すなわち人がどのような関与をどの程度行いながら、存続可能な個体群の確立に導くのかは論じられていない。続く第5章で「コウノトリが生息するための環境整備の推進」が取り上げられているので、人の関与は環境整備にとどまると読み取ることでもできなくはない。先ほどの見取り図でいえば、放鳥後は「農業生物」として位置づけられることになる。

最初の放鳥は、現時点でも生息可能との推測に基づき、2005年9月24日に郷公園で行われた。放鳥された5羽のコウノトリの行動は、自然再生という人間の行為を評価してもらう指標でもある。だがコウノトリたちは、すぐに郷公園周辺に居つき、開放型の公開ケージで展示用に飼育しているコウノトリの餌に依存するようになった⁽¹⁰⁾。2006年1月に初めて遠出し、行動域が拡大すると思われたが、春になると郷公園から出ることが極端に少なくなってしまった。郷公園内では、「放し飼いだ」「半飼育状態だ」との現状認識が示されるようになる。筆者自身は放し飼いだ状態も野生復帰であると考えていたが、議論を重ねるなかから、コウノトリによって環境を評価してもらうことも必要だと考えるようになった。

その頃、郷公園前の祥雲寺拠点では別の放鳥方法が試されていた。「羽切り済みのペアを屋外ケージがある拠点で飼育・繁殖させ、巣立ちした幼鳥を自由にさせる」という方法である。幼鳥が「野生」に戻っていく方法であり、「半飼育」で育った幼鳥の行動が注目された。しかし、拠点と郷公園は目と鼻の先であり、放鳥されたコウノトリたちと行動を共にし、放し飼いだ状態になってしまうことが懸念された。現状では新たな放鳥方法を評価できないし、コウノトリの行動によって自然再生を評価できない。巣立った幼鳥に園外にエサ場があることを覚えてもらう必要がある。「野生復帰には餌を公園に依存せず、園外で自力で取る力をつけさせることが必要」と判断した郷公園は、2006年8月3日から「自立促進作戦」を行うことにした。公開ケージで展示用に飼育されているコウノトリを順次収容し、放鳥コウノトリが餌を食べられないようにする作戦である。「野生」は自立と不可分なのである。この作戦は「自立」「野生化を促進」「荒療治」と地元新聞各紙で取り上げられた。

8月7日に開催された「コウノトリ野生復帰推進連絡協議会」では、「周辺住民にも情報提供を」との要望や「幼鳥の鳴き声に心配する住民の声がある」などの発言があった。郷公園は、幼

菊地：コウノトリの野生復帰における「野生」

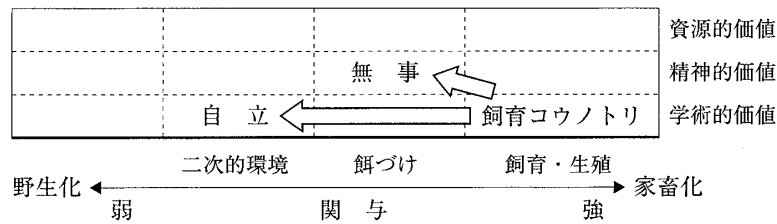


図3 自立促進作戦

鳥はわずかしか餌を採れない日もあるが、「動物の子は親に甘え、鳴くと親が餌を与える。それを親や人が切らないと」自立できないと説明した。自立促進作戦の結果、コウノトリたちの行動範囲に一定の広がりが見られた。

ところが、8月17日、郷公園は自立促進作戦の中止を発表した。市民から「死んだらかわいそう」「餌を求めて鳴き続ける幼鳥がかわいそう」といった声や市から生息環境の回復は不十分であり、給餌するのは当然との意見が寄せられ、現状では理解を十分に得ることができず、野生復帰の推進に支障が生じるからである。

私たち郷公園は情報提供の重要性を改めて認識した。しかし、情報提供の問題に過ぎなかったのだろうか。郷公園（あるいは研究者）の考える「野生」が「正解」として位置づけられることへの違和感だったといえないだろうか。生息環境は現状でも十分であり、基本的に人が関与することなく、コウノトリが努力して自立することが野生復帰であるとの考えである。人が関与しないのが「野生」という認識がベースにある。それに対する「かわいそう」という声は、一見すると感情的な反応と思われる。そうした側面があるのは確かだが、反対した人たちは生息環境の回復は不十分との現状認識に基づき、基本的に人が関与するのが野生復帰と考えている。そうした心象をコウノトリの無事を第一義とすることから、「無事」としよう。無事が人の関与の基準なのである。努力すべきなのはコウノトリよりも人である。人が積極的に関与することが、放鳥した人間の責任であるとの考えを示す人もいる。

自然再生の現状をコウノトリの行動によって判断することは科学的妥当性があり、研究者の目線に立てば自立促進作戦の意義はある。それに対してコウノトリに負担を与えてまで科学的データを取ることに疑問が投げかけられたのである。コウノトリは文化的・社会的存在であり（菊地, 2006）、科学的目的のためだけに放鳥したわけではない。「野生」を定義するのは郷公園だけではない。筆者は、地域になじんだコウノトリの野生復帰をめざすために、地域社会で培われてきた感性や知恵、すなわち現場知の重要性を指摘した（菊地, 2006）。コウノトリの「無事」を願う心象から、どのような自然とのかかわりが創出されるのかを問う必要があるだろう。

この作戦を通して、「野生」の定義のズレが顕在化し、野生復帰の目的や人の関与のあり方が問い直されたといえるだろう。見取り図でいえば、郷公園は二次的環境と学術的価値が交差する象限にコウノトリを位置づけていたのに対し、反対する市民たちは、給餌という関与によってコウノトリの精神的価値を実現しようとしていたといえる（図3）。

5.2. 給餌の論理

この作戦で郷公園は、給餌はコウノトリの行動をコントロールする技術という考え方を採用する。場合によっては「定着」をめざした給餌を行うことにしたのである。2006年9月に、豊岡

市河谷の拠点から放鳥されたコウノトリは、自力で餌を採っていたが、1ヵ月後に郷公園に戻ってきてしまった。このままでは、2005年に放鳥したコウノトリと同じ道——郷公園での放し飼いの状態——を歩むことになると考え、河谷拠点での給餌を実施した。その結果、コウノトリは河谷周辺に定着し、ペアを形成し、産卵した。冒頭のヒナは、この給餌されたコウノトリを両親にしている。「野生」化のために給餌を行うことにしたのである。その一方で、給餌に依存しない個体も徐々に増えてきている。郷公園の「野生」化に向けた当面の方針は、「自立」から「定着」へ転換した。

コウノトリが生息していた昭和30年代、長靴を履いて田んぼに行くと、ドジョウが土のなかにもぐる音がしていたとの話がある。現在、田んぼを歩いてもドジョウがもぐる音は聞こえない。そうした「記憶」を持っている人たちからすると、生息環境が十分整備されているとは思えない。子育て中のコウノトリをほうっておくわけにはいかない。コウノトリを観察する市民のなかから、人工巣塔に営巣しているコウノトリに、給餌する人たちが現れだした。

2007年9月に「コウノトリ湿地ネット」(以下、ネット)が設立され、そこにはコウノトリに関心がある多様な市民が集っている。ネットは営巣した豊岡市戸島で2008年3月から給餌を実施している。50年といった時間軸でみると、徐々に関与をなくし存続可能な個体群をめざす方向性は共有している。ただ、保護の歴史のなかで人は関与し続けたのであり、放鳥しても関与はすぐには変わらない。ネットによると、現状では生息環境の整備は不十分であり、給餌は整備されるまでの支援活動であるが、繁殖を助けるためのものでもある。一方郷公園は、給餌はコウノトリの「野生」化を促進しないので、基本的には望ましくないと考えている。給餌は「定着」という科学的・政策的目的のためであり、繁殖を手伝うものではないのである。しかし、餌をもらうコウノトリにとってみれば同じであるし、市民から見ても給餌は給餌である。

ある人が給餌をしていると、コウノトリが数メートルまで近づいてくることがあるという。コウノトリと身体的にかかわるなかで、地元のコウノトリという意識が芽生えるようになった。地元のコウノトリが一番「かわいい」という。家族からは「家族以上の存在」と言われている。コウノトリが無事にいてくれて、ヒナが育っていくことが市民の誇りになるという人もいる。

筆者が以前行ったコウノトリの聞き取り調査では、「かわいい」という語りはほとんどみられず、「うちのコウノトリ」という語りも皆無であった。それに対して給餌活動によって生息数が大幅に増加した北海道のタンチョウに関する調査では、給餌によるタンチョウの「家族化」が見られ、豊岡のコウノトリとの違いを見出した⁽¹¹⁾。豊岡でも、給餌によるコウノトリの家族化が見られるようになったといえよう。

動物観を探求する石田戡は、動物の保護だけでは満足できず、愛護という言葉が使われるようになったと指摘する。餌やりという行為は愛情の発露としてあり、「精神的な満足感を満たす」「動物との関係をつなぎとめたい」と判定できるという(石田, 2008: 193-194)。一方、動物への給餌は爆発的に個体数を増加させ、動物を人馴れさせてしまう問題が指摘されている。実際、タンチョウでは人馴れが問題になっている(日本野鳥の会, 2007)。

筆者は以前、但馬にはコウノトリの愛護的な団体がみられないと論じた(菊地, 2006: 217)。ネットによる給餌活動は、コウノトリとの直接的、身体的なかわりのあり方であり、「愛護」という精神的価値を新たに創出している。ただ、ネットは愛護団体と自己認識しているわけでは

菊地：コウノトリの野生復帰における「野生」

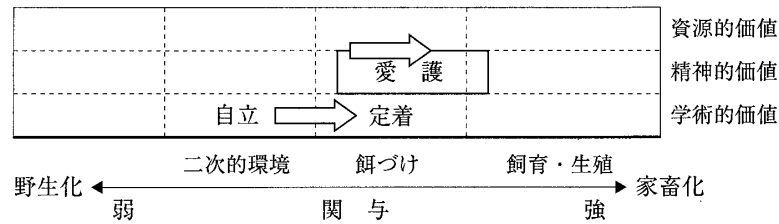


図4 給餌の論理

ない。コウノトリへの身体的なかかわりから生じる愛護を1つの軸にしなが、地域環境を見直し、生息環境の整備に向けた活動を展開し、コウノトリの採餌調査など市民調査も行っている。活動から地域専門家が誕生し、新たな現場知が生み出されつつある。こうした能動的な活動は、野生復帰によって新たに展開した人と自然のかかわりのダイナミズムであり、環境創造の主体形成という点からもコウノトリの野生復帰を重層的な取り組みにする。

とりわけ地域再生としての野生復帰という視点からすると、「自分の社会を自分で作ってゆく」(宮内, 2003: 186) 仕組みとして市民調査の展開が期待される。課題は、市民の主体性(能動性)と専門性の獲得をいかに両立するかである(立澤, 2007: 44)。私たちプロジェクトに参画する専門家の専門性と市民調査へのかかわり方が問われている。

給餌の問題に戻ろう。仮に給餌が「野生」を損なうならば、明治期にはコウノトリは「野生」を失っていたことになる。そうした解釈を採用するならば、いったいどこに「目標」を設定したらいいのだろうか。給餌をしていなかった江戸時代に設定することは、現実的ではないだろう。筆者は給餌が「野生」を失わせるかどうかの議論をしたいわけではない。野生復帰は再野生化と家畜化のプロセスとしてあり、コウノトリは人の関与の強弱により、野生性や家畜性という状態のなかを揺れ動いているのである。給餌はこのプロセスに位置づけられる関与のあり方であり、選択肢の1つである。また給餌を軸に、地域の見直しや市民調査といった動きが出てきていることは、評価できる。ただ給餌がどの方向に向っているかは確認したほうがいだろう(図4)。羽山は人間と野生動物のかかわりのなかで最も古くからある方法である一方、現代社会で餌づけが無条件で認められることはないという(羽山, 2001: 101)。では、その条件とは何か。「野生」が問われている。

6. おわりに

コウノトリの野生復帰において、コウノトリの再野生化という一方向に進んでいるのではなく、再野生化と家畜化の間を「行きつ戻りつ」している。本稿で取り上げなかった対応に、近親交配の阻止がある。近親交配が進むと、生存率、繁殖率が低下する可能性が高まることをふまえ、郷公園は近親交配を避けて多様な血統を残すため、兄弟婚を阻止する方針をとっている。この方針に基づき、ペアになった兄弟婚のオスを回収した。郷公園は遺伝的管理という科学的目的のための「生殖管理」という関与を行ったことになる。この対応は、再野生化-家畜化の図式に従えば、「野生」化という名目で家畜化を強めているといえる。一度再野生化の方向に振れながらも、再び家畜化に振れている。

「はじめに」で述べた違和感は、筆者自身がこうした「行きつ戻りつ」のプロセスをよく理解していないがゆえに生じたものかもしれない。

「行きつ戻りつ」のプロセスで、人の関与のあり方をめぐって、「野生」の定義のズレ、意見や感情のすれ違いが見られなくもない。こうしたすれ違いは、すぐに解決できるようなものばかりではないだろう。筆者はコウノトリの聞き取り調査から人とコウノトリの関係は矛盾する関係であることを明らかにしたが（菊地，2006），野生復帰という取り組みそのものも、また矛盾する側面を持っている。野生復帰は不確実性を前提にしながらも科学をベースにしなければならない。科学的な目的を達成することが野生復帰という取り組みにおいて求められるが、広範な市民の参加が得られなければならない。コウノトリは学術的価値を持っているとともに、精神的価値も創出されている。「野生」という名で人の関与を強めたり弱めたりする。「野生」は目標であるが、たえず揺れ動いている。

人里を舞台とするコウノトリの野生復帰では、関係主体が拡大しており、必然的に価値基準や現状認識が多様化してしまう。不確実性と矛盾が不可避であり、こうした課題に対して「正解」が出せるわけではない。ただ、どのような価値に基づき、どのように人が関与しながら、野生復帰を推進していくのかという見取り図は必要であろう。それによって、どこにすれ違いがあり、どこに一致点があるかをある程度見通すことができるようになる。本稿では不十分ではあってもその提示を試みたが、対立や矛盾の解消に向けた道筋を示すものではない。

ただ、対立や矛盾は解消するものというよりも、むしろ常に課題に挑戦させ続ける緊張を与えてくれるものにとらえたほうがいいのではないだろうか（柿澤，2000：193，菊地，2006：248-249）。「野生」が曖昧であることは、逆説的であるが、さまざまな論理をつなぐ、多義的な概念として機能しうることを意味しているといえないだろうか。再野生化-家畜化を行き来するコウノトリを軸に、自然の再生が進み、自然とのかかわりや価値が創出されている。本稿では述べられなかったが、コウノトリを軸に環境と経済をつなぐ取り組みや農業の再生をめざした取り組みが展開されている。ここでコウノトリは資源的価値を有している⁽¹²⁾。コウノトリの野生復帰において「野生」は、政策化され科学化され運動化された「野生」として現出する。

正解のない「野生」をめぐるさまざまな論理や価値や感情を試行錯誤しながらつなげ、多様な主体間での目標や地域の未来像を絶えず描き続ける仕組みと、より開かれた議論の場の構築が、野生復帰という取り組みにおいて求められている。この課題に対して、「聞く」という手法を持つ環境社会学者はいくつか果たしうる役割がある。

1つは文脈を構築する役割である⁽¹³⁾。問題の構造を包括的にとらえるという環境社会学の志向性は、多元的な価値観を調整し、統合する技能を潜在的に持っているともいえる。本稿では見取り図の提示を試みた。

第二に地域の「学習システム」構築への貢献である。地域も「最適な専門家」を選択できる「目利き能力」が求められる（敷田・森重，2006：202-203）。野生復帰を推進するには、市民と専門家との間に緊張感を持ちながらも信頼ある関係が不可欠である。参加する市民も研究者も地域にこだわり、地域を見直し、よりよい地域を創ろうとする意識をベースに、共に学ぶことが求められる。そうでなければ、野生復帰は専門家や行政の自己満足に終わってしまうだろう（柿澤，2000：193）。専門家と市民をつなぐ専門家としての環境社会学者の役割である。言い換えるとフ

菊地：コウノトリの野生復帰における「野生」

アシリテーターとしての役割である。

第三に暗黙知的な現場知の紡ぎ出しである。現場知に基づかない再生モデルは地域になじまないし、持続的であることは難しい。専門家が自己満足に陥らないためにも、地域に生きる人々にとって意味ある現場知を主題化し、学ぶことが求められる。さらに、断片的な現場知を組織化することによって「知」として再生し、それを機軸に政策提言につなげていくことが求められる。ただ、いわゆる討議空間では、暗黙知的な現場知を扱うのは難しい。ここにこそ環境社会学者の出番がある。

野生復帰や自然再生といったプロジェクトに環境社会学者の参画が求められるようになってきた⁽¹⁴⁾。「プロジェクトの環境社会学」という研究と実践がクロスオーバーする領域は、開かれたばかりである。

注

- (1) 筆者は郷公園の研究者という利害関係者の1人であり、プロジェクトは現在進行形である。したがって本稿の記述には限界がある。一方でプロジェクトに参画している立場性ゆえに見えてくることもあるに違いない。また「野生」をめぐる問題は、筆者も当事者の1人として責任を負っているが、本稿の記述は郷公園の見解ではなく、筆者個人の見解であることはご理解いただきたい。
- (2) 柿澤宏昭は、アメリカの森林局が森林管理目標の設定という価値的で「正解」のない課題に対して、伝統的な林業技術に基づく森林局としての「正解」を押しつけたために深刻な対立を招いたという（柿澤，2001：48）。
- (3) 池田啓「郷公園のコウノトリは野生？ ペット？」（連続講座コウノトリ〔郷公園主催〕，2005年7月9日，於：豊岡市立コウノトリ文化館）。
- (4) 無作為抽出した豊岡市民1000人へのアンケート。結果は未発表である。
- (5) 一見、「野生」を本質化しているように見受けられるが、野生動物問題には正しい解決方法はなく、野生動物自身の問題ではなく、人間社会のありようの問題であると指摘している（羽山，2001：9）。
- (6) 役に立つか立たないかという視点は、人間の側のものであり、生態系という視点からすると違った評価になる。宇根豊は、田んぼにおける害虫でもなく益虫でもないただの虫の重要性を指摘し、人間にとって役に立つという視点の相対化を試みている（宇根，1996；2001）。基本的に宇根の主張に同意するが、本稿では人間が意図的に呼び寄せたのではないという意味で雑草的生態という用語を用いる。
- (7) さらに多くの価値を設定することは可能であろう。本稿ではコウノトリの野生復帰という課題からこうした価値を設定した。
- (8) 宇根豊は田んぼを主な餌場とする生きものと農業生物と名づけ、コウノトリもその生きものの1つとして取り上げている（宇根，1996：15）。
- (9) 秋篠宮文仁は、鶏の家禽化モデルとして「行きつ戻りつ」過程を提示している（秋篠宮編，2000：77）。
- (10) 公開ケージで飼育しているコウノトリは風切り羽を切られ、飛べない状態になっている。このコウノトリたちに与える餌を目当てに、放鳥コウノトリが公開ケージに入るようになったのである。
- (11) 筆者が「鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ開設20周年記念シンポジウム」で行った基調講演（2007年11月11日，於：北海道鶴居村）。タンチョウで特徴的なのは、自宅の庭に来るタンチョウに名前をつけたり、擬制家族として意味づけていることである。また、給餌が家族史のなかに位置づけられることもある。
- (12) 生物学的な再導入という用語ではなく、野生復帰という用語を用いることにより、「野生」というコ

ウノトリのブランド化が可能になる。本稿で見た「野生」をめぐる問題は、コウノトリのブランド化のための社会的コストとみることも可能かもしれない。

- (13) 谷口吉光「環境問題の解決に環境社会学はどのような貢献ができるか」(環境社会学会第36回セミナー, 2007年12月8日, 於: 龍谷大学)
- (14) 環境社会学者の茅野恒秀氏(法政大学大学院/日本自然保護協会)は, 群馬県みなかみ町の「赤谷プロジェクト」において, ファシリテーターという重要な役割を果たされている。

文献

- 秋篠宮文仁編, 2000, 『鶏と人——民族生物学の視点から』小学館.
- 羽山伸一, 2001, 『野生動物問題』地人書館.
- , 2006, 「自然再生事業と再導入事業」淡路剛久監修/寺西俊一・西村幸夫編『地域再生の環境学』東京大学出版会, 97-123.
- 池田啓, 2004, 「高病原性鳥インフルエンザに襲われたコウノトリ野生復帰事業」『動物観研究』9: 73-78.
- 石田戢, 2008, 『現代日本人の動物観——動物とのあやしげな関係』ビイング・ネット・プレス.
- 柿澤宏昭, 2000, 『エコシステムマネジメント』築地書館.
- , 2001, 「総合化と協働の時代における環境政策と社会科学——環境社会学は組織者になれるか」『環境社会学研究』7: 40-55.
- 菊地直樹, 2006, 『蘇るコウノトリ——野生復帰から地域再生へ』東京大学出版会.
- ・池田啓, 2006, 『但馬のこうのとり』但馬文化協会.
- コウノトリ野生復帰推進協議会, 2003, 『コウノトリ野生復帰推進計画——コウノトリと共生する地域づくりをめざして』.
- 丸山康司, 2007, 「市民参加型調査からの問いかけ」『環境社会学研究』13: 7-19.
- 宮内泰介, 2003, 「市民調査という可能性——調査の主体と方法を組み直す」『社会学評論』53(4): 566-578.
- 日本野鳥の会, 2007, 『鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ開設20周年記念誌』.
- 野澤謙・西田隆雄, 1981, 『家畜と人間』出光書店.
- 敷田麻実・森重昌之, 2006, 「地域環境政策に専門家はどうかかわるか——地域自律型マネジメントとその実現を支援する専門家のかかわり」『環境経済・政策学会年報』11: 194-209.
- 立澤史郎, 2007, 「政策提言型市民調査はなぜ失敗したか?——野生生物保全分野の経験から」『環境社会学研究』13: 33-47.
- 高橋春成, 2001, 「文化の伝播とブタの野生化, そして環境問題」高橋春成編『イノシシと人間——共に生きる』古今書院.
- 宇根豊, 1996, 『田んぼの忘れもの』葦書房.
- , 2001, 『「百姓仕事」が自然をつくる——2400年めの赤トンボ』築地書館.

付記

本稿執筆にあたり, 兵庫県立大学教授の池田啓氏, コウノトリ湿地ネットの佐竹節夫氏, 北海道大学教授の敷田麻実氏からさまざまなアドバイスをいただいた。河邊久子氏, 柳田幹子氏には草稿を読んでいただいた。また編集委員のみなさんからも有意義なコメントをいただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

(きくち・なおき)

菊地：コウノトリの野生復帰における「野生」

Ambiguous “Wild” in the Case of the Reintroduction Project of the Oriental White Stork

KIKUCHI Naoki

University of Hyogo/Hyogo Prefectural Homeland for the Oriental White Stork
128 Shou-unji, Toyooka, Hyogo, 668-0814, JAPAN

The reintroduction project of the oriental white stork carried out in Tajima region, the northern part of Hyogo prefecture, Japan, moved forward a step when the second generation of released storks came into the world. A “reintroduction into the wild” project can be regarded as any project where humans, intentionally or deliberately, force animals in captivity back into their natural habitat. However, the definition of “wild” is left vague, and the nature of human involvement in the projects has not been adequately discussed, either. There seems to be an inconsistency in the interpretation of the term “wild” among people who are actively involved in such projects and the necessity of feeding the oriental white storks in wild is sometimes under dispute. It is inevitable that the standard of value and recognition of the state of the project will vary with a reintroduction project such as the case of the oriental white stork. To arrive at mutual consent by all parties concerned, a sketched outline of the project, which demonstrates how progress should be evaluated, how people should be involved, and how the reintroduction project should proceed, is needed.

The term “wild” is to be conceptualized, in this paper, by measuring how much the animal is relevant to humans’ activities. This concept is expressed in the diagram showing to what extent humans are controlling the animal on the horizontal axis, and how valuable the animal is to human society on the vertical axis. The relationship between animals and humans is represented as a process of domestication and of “going back to the wild”. According to its balance, it is placed in the respective quadrant.

When reconsidering the project with the aid of the abovementioned diagram, it is clear that an animal can be seen as going back and forth between “going back to the wild” and “domestication”, instead of going solely in the direction of, “going back to the wild”.

It is evident, that what is needed is a system that brings together the various theories, values, and emotions regarding the term “wild”, through a continuous process of trial and error, and that continuously visualizes the future of the region, and sets a common objective for the various groups involved. To this end, the necessary role of the environmental sociologist is highlighted.

Keywords: wild, the oriental white stork, reintroduction project, going back in the wild and domestication, feeding